

特集
藍より青き吉野川
川と人のかかわり

Special Features
The Blue Color Yoshino River rather than in Color Indigo
Mankind and the River

吉野川と人のかかわり
Mankind and the Yoshino River

吉野川の水面利用

西 徹

NISI Tooru

山城町/町長



1 山城町の概況

徳島県山城町は、四国の中央部に位置し、徳島県の最西端である三好郡に属している。東は吉野川を隔て

て西祖谷山村・池田町に接し、南は高知県長岡郡大豊町に、西は愛媛県宇摩郡新宮村に、北は池田町に接している。東西に短く、南北に長いほぼ四辺形をした西に

高く東に低い山ばかりの地域である。町の面積は13,157km²、人口5,514人、世帯数2,099戸、高齢化率37.3%の過疎山村である(人口、世帯数、高齢化率は2003年3月末現在)。町の東端を南から北に四国三郎吉野川が流下し、北流する吉野川に野鹿池山及び三傍示山に源を發する藤川谷川、白川谷川、愛媛県別子銅山から流れる銅山川の三河川が合流している。

2 吉野川の水面利用の今昔

1 吉野川流木

吉野川の上流は樹木がうっそうと織茂して杉松の良材に富み、その木質が堅緻で節は少なく、「土佐材木で

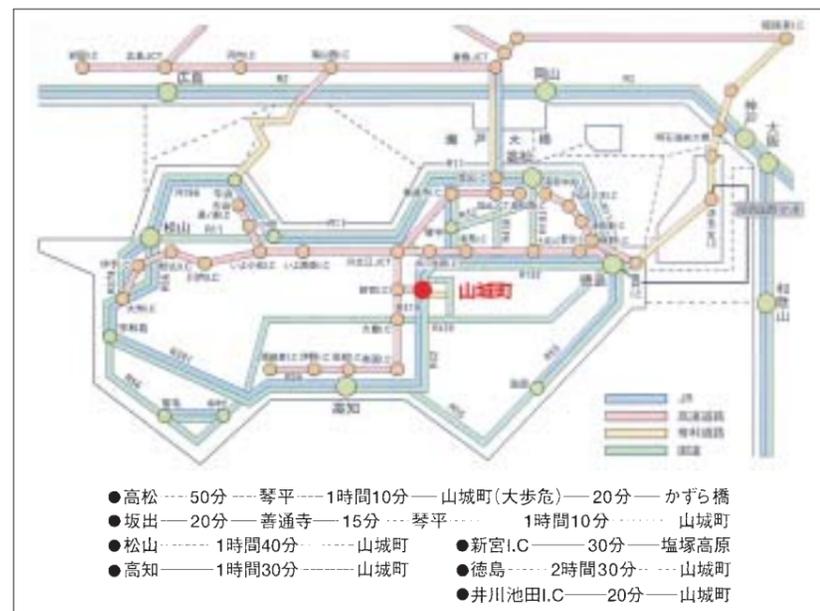


図 - 山城町の位置図



写真1 - 吉野川の平水時写真



写真2 - 吉野川増水時写真



写真3 - 材木流送写真

節がない」と称せられた。昔は専ら吉野川を天然の通路として搬出するより外に道がなかった。流木の方法は6月から8月頃までに谷川へ出して棚にかけて洪水を待ち、雨季となり水量が増し、洪水が来ると木材は吉野川を流下し河口の徳島の市場へ出された。この流木は平水には害がないが洪水には堤防を破り、河水の方向を変え、家屋橋梁を破壊し、耕作物を害するなどその惨



写真5 - 昔の鮎釣風景写真



写真4 - 小歩危ダムの計画予定地であった写真

害は言語に絶するものがあつた。流木は史実としては慶長5年から元和6年(1600~1620)の間、阿波の守であった藩主蜂須賀至鎮が無主流木について文書を出している。天明8年から慶応年間(年号不明)までの間、流木は禁止されていた。(慶応年間に阿波藩は流材を許可したが流材に対する課税額が高かったので数年で流材する者も無くなった。)

明治2年(1869)に阿波藩と土佐藩の間で「流木に関する仮定約」が締結され、明治5年(1872)「吉野川流材定約書」が名東県(徳島県)と高知県の間に締結された。その後吉野川流材取締規則を経て昭和18年(1943)に流材は禁止となった。

2 小歩危ダム

昭和43年(1968)9月、電源開発より小歩危ダムの着工計画について説明会が行われた。この説明会をきっかけにして山城町議会にダム対策調査特別委員会が設置された。度重なる会合と決議文の採択、要請行動により翌年5月の電発審議会でも小歩危ダムの提案が見送られた。昭和45年8月には中止となり大歩危・小歩危の景勝が現在に残っている。



写真6 - 昔の鮎釣風景写真



写真7 - 現在の鮎釣写真



写真8 - 紅葉写真

屋兼飲食店を開業し一艘の「かんどり舟」で、ぎぎや鰻漁の傍ら宿に泊まる客の閑を慰めるため、舟に乗せ大歩危を見せたのが始まりである。時代の流れと共に舟の数も増やし、エンジン付きの新型船となり、現在は5艘により観光客を楽しませている。

大歩危の美は、個々の美ではないとされており、深い渓谷、大岩盤に片理も鮮やかに続く岩、たたえる藍の水、これらが変わらない美の上に深山桜やツツジが咲き乱

れ、若葉が茂ってやがて全山紅葉し落葉すると雪を呼んで四季が流れる。それは、大歩危が四季とりどりの衣装を取り替えてその麗質を發揮するに似て、訪れる人には森厳に、荘厳に、神秘的に映る。遊覧船での見所は歩危小唄に歌われているように春は桜に岩つつじ、夏は若鮎、秋は紅葉、冬は渓谷の雪景色である。

5 吉野川の激流を体験する

昭和62年(1987)県カヌー協会主催で第1回四国カヌーフェスティバルが夏の観光イベントとして開催され、町外から150名が参加しカヌー競技、体験教室で楽しんだ。夜は町民との交流イベントがあり大いに賑わった。この四国カヌーフェスティバルはその後毎年開催されていたが、平成8年(1996)の第10回で開催目的が達成された

として以後開催は中止となった。四国カヌーフェスティバルにラフティングツアーが企画されたのは平成5年(1993)からである。ラフティングは、長さ5メートル、8人乗りの大型ゴムボートで激流に挑戦するアメリカ生まれの新しいスポーツである。パドルを操りながら急流を下っていくが、カヌーと違って安定感があり、ライフジャケットとヘルメット、ウエットスーツを身に着け、川を

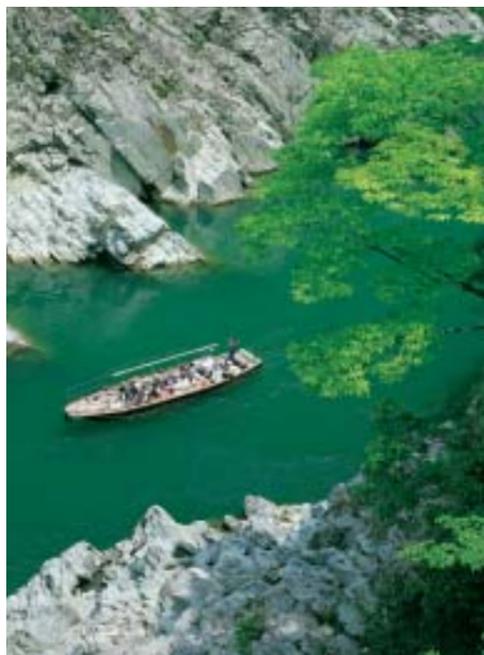


写真9 - 大歩危遊覧船風景写真

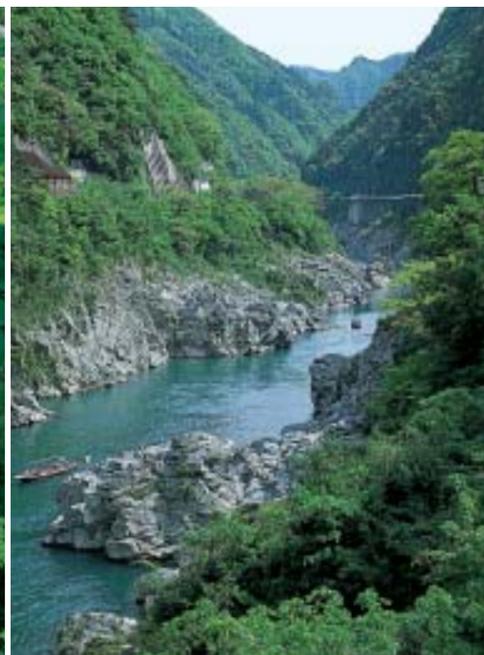


写真10 - 大歩危遊覧船風景写真

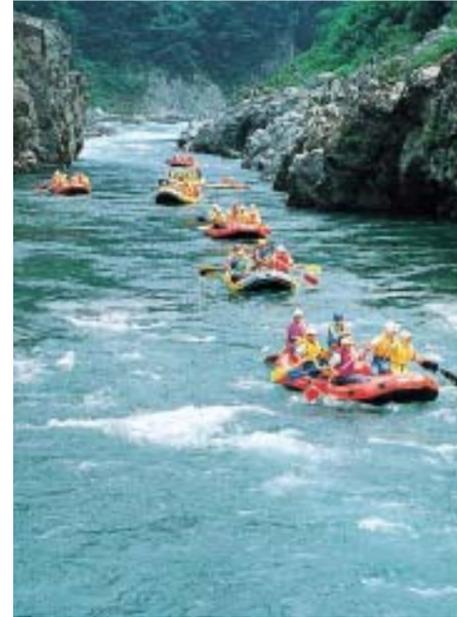


写真11 - ラフティングの写真



写真12 - 激流写真

熟知したプロのガイドが同行するため安心して激流に挑戦することができる。現在は14業者がツアーを開催しており、年間約3万人が吉野川の激流を体験している。毎年、5月から10月のシーズンのうち、鮎釣のシーズンと重なる6月1日から9月末までは、ボート・カヌーと釣師とのトラブルが後を絶たない。

今日に至る経過の中では、鮎釣師とボート・カヌーの間のトラブルをめぐり、漁業組合・ラフティングツアー企画者・町による話し合いが幾度と無く繰り返され、協定書の締結に至っている。因みに、双方の言い分を徳島新聞「読者の手紙」により紹介すると、「吉野川は美しく魚が豊富で、中でも鮎は天然遡上が多く上流には鮎にとって良い苔の付く絶好の岩場があり、鮎の習性を利用した友掛け漁法のファンは毎年6月の解禁を楽しみにしています。



写真13 - 小歩危のト口場、カヌー写真

近年ラフティングやカヌーが急激に増加し、土、日などは朝から夕方までカラフルなウェアを着た若者が、兩岸の釣人の迷惑を尻目に奇声を発して水面をかき回します。驚いた鮎は深みに逃げ友掛け漁は

できません。若者がたくさん来るのは良いことだが長い歴史を持つ漁師を押しつけてよいものでしょうか。」「私はカヌーで川下りをするのが好きで、大歩危峡とかいろんな川を下ります。そして、いろんな釣り師と出会いました。すみませんと声をかけて通りますが、笑顔で答えてくれる人、罵声を浴びせたり、石を投げようとする人もいます。川というのは、公道みたいなもので、誰が通ってもいいはずですよ。だから鮎釣り以外は締め出すなんて言わないでください。大歩危・小歩危は日本でも最大級の激流で、唯一ラフティングの商業ツアーが行われるところですよ。日本一のカヌー・ラフティングの川を閉ざさないでください。」といった状況である。

現在、町の仲介により結んでいる協定の内容は、「ラフティングの通過は1日1回」、「各漁場の通過時間は取決め時間の前後30分以内」、「漁業者に通過することを合図で知らせる」、「ラフティング企画者のボートが識別できるようにする」、「規制の期間は6月1日から9月15日まで」と取決められている。

町としても若者が多く訪れて交流人口が増えることは大歓迎である。しかし、自然が作り上げた吉野川、大歩危・小歩危の渓谷と日本一の激流は限られた区域であり、山城町民にとっては自然が与えてくれた資源である。今後も何億年と言う長い歳月の間、鮎釣師とカヌーやラフティングの愛好者を楽しませてくれることであろう。後から訪れる愛好家に幻滅されないよう大歩危・小歩危のルールを守って楽しんでいただくことは大いに歓迎したい。